

2022 AC

1st. Celebrate Sukkot

原語で味わう創世記第1章

集中特別講座 10/9~16

11日(朝) No.4

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

①ヨハネの福音書5章39節

あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。

その聖書は、わたしについて証ししているものです。

【新改訳2017】

②イザヤ書 46章10節

わたしは後のことを初めから告げ、まだなされていないことを昔から告げ、『わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。

※聖書のシナリオライターは時間と空間に支配されない永遠の神です。シナリオが歴史の中に突入する時、その初めと終わりが規定されることは当然のことです。

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

③イザヤ書34章16節

【主】の書物を調べて読め。
これらのもののうち、どれも失われていない。
それぞれ自分の伴侶を欠くものはない。
それは、主の口がこれを命じ、
主の御霊がこれらを集めたからである。

※「自分の伴侶」にたとえられているのは、神のみことばの証言が必ず伴侶のように置かれているということの意味します。例えば、「千年」「十四万四千人」など。

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

●創世記1章に関する注解書は多く書かれていますが、その多くが宇宙(地球)の始まりと考えています。しかしアシュレークラスでは、創世記1章を「**神の永遠のご計画の全貌が啓示されている章**」という視点で学んで行きます。

【新改訳2017】ヘブル人への手紙 4章12節

神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、**たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。**

●私たちが持っている「理解の型紙」(この世の知恵、常識、教理)という眼鏡を外して、霊を働かせることが不可欠です(Ⅱコリ5:16, 3:6)。私たちの霊の目が開かれるよう、シエーム・イエシュアの名を呼びつつ、学んで行きたいと思います。

1. 4節のテキスト

- 今回は4節のみを取り上げます。

【新改訳2017】

神は光を良しと見られた。神は光と闇を分けられた。

וַיֵּרָא אֱלֹהִים אֶת־הָאוֹר כִּי־טוֹב
見たそして 神は その光 を 良し まことに

וַיַּבְדֵּל אֱלֹהִים בֵּין הָאוֹר בֵּין הַחֹשֶׁךְ
分けたそして 神は その光 の間 を 分けた そして

- 新しく登場する語彙は動詞の「見る」「分ける」と形容詞の「良し」です。

※動詞①「見る」を意味する「ラーアー」(הָאָר)

②「分ける、区別する」を意味する「バーダル」(בָּדַל)

※形容詞「良い、美しい、いつくしみ深い」を意味する「トーヴ」(טוֹב)

※名詞①「その光」を意味する「ハーオール」(הָאוֹר)。 3節の「光」

②「その闇」を意味する「ハーホーシェフ」(חֹשֶׁךְ)。 2節の「闇」

2. 「トーヴ」 (טוב) の概念 ①

●今回はまず**神の善**(God's goodness)に注目したいと思います。それは、組織神学では「神論」の中の「神の属性」の一つとして扱われます。神の属性の分類も学者によって異なりますが、私自身は以下のように整理しています。神の属性全体の総称は「聖」です。この「聖」は神のすべてのご性質の総称です。この「聖」という神の本性的の中に以下の属性があります。

(1) 絶対的属性

被造物とのかかわりを一切持たない神のご性質で、自存性、無限性、永遠性、無究性、不変性、完全性があります。

(2) 相対的属性

被造物一般とのかかわりに現わされる神のご性質で、遍在、全知、全能、知恵、善があります。特に、善は被造物一般に対する神の配慮、福祉を意味します。たとえば、一羽の雀、空の鳥、野の花に対する神の配慮がそうです。

(3) 道徳的属性

とりわけ人間とのかかわりにおいて現わされる神のご性質で、愛、恵み、憐れみ、忍耐、義、公正、真実などがあります。

2. 「トーヴ」(טוב)の概念 ②

●聖書では、神の「善」(トーヴ)を被造物(天と地、自然と人)に対する神の恩寵的かかわりの総称的概念として最初に登場させていることに注目すべきです。

●たとえば、それが自然界に生きるものに対して向けられるとき、空の鳥が養われ、野の花が美しく装われます。神の配慮が自然の中の隅々まで行き届いているのです。ましてや人はそれらよりももっとすぐれた者であるゆえに、神(天の父)はもっとすぐれた良いものを与えてくださるのです。神の善が人に向けられる時には、その善は神の愛として示されます。その神の愛は、さらに恵みとあわれみ、忍耐となって表わされます。愛も恵みもあわれみも、すべては「神が善である」がゆえに、神と人との健全なかかわりが機能するのです。

●私たちが「霊の中で生きる」とは、この神の善に対して、常に「アーメン」と告白することです。そうするなら、それが実体化されるのです。例:「いつも喜んでいなさい。・・・すべてのことにおいて感謝しなさい」



2. 「トーヴ」 (טוֹב) の概念 ③

(1) 形容詞としての「トーヴ」 (טוֹב)

●形容詞の頻度が**489回**と最も多いです。「すばらしい」 (good, rich, noble)、
「いつくしみ、善」 (goodness)、
「いつくしみ深い」 (good)、
「しあわせな」、「まさる」 (better)・・・など。

(2) 名詞としての「トゥーヴ」 と「トーヴァー」

①**男性名詞**は「トゥーヴ」 (טוֹב)、使用頻度は**32回**。主の「いつくしみ」 (good, goodness)、
「最良のもの」 (best)、
「良いもの、貴重なもの」 (good things)、
「楽しみ」 (gladly)、
「繁栄」 (prosperity)、
「恵み、気前良さ」 (bounty, blessing)、
「美しさ、好ましさ」 (fair)、
「しあわせ、魅力」 (attractive)

②**女性名詞**は「トーヴァー」 (טוֹבָה)、使用頻度は**67回**。「善」 (good)、
「良いこと」 (good, good things)、
「幸い」 (good thing)、
「恵み、気前良さ」 (bounty)、
「いつくしみ」 (goodness)、
「しあわせ」 (prosperity)。

2. 「トーヴ」 (טוֹב) の概念 ④

(3) 動詞としての「ヤータヴ」

●動詞は「ヤータヴ」 (יָטַב) です。使用頻度は**28回**。意味としては神の「御心にかなう」とか、神の目に「美しい、好ましい」、あるいは「しあわせになる、良くなる」という意味でも使われます。他にも、「～と比べてまさっている、上機嫌である、心が陽気である、寛大である」の意味もあります。

●「良し」という語彙「トーヴ」 (טוֹב) は、**1章だけでも7回** (4, 10, 12, 18, 21, 25, 31節)。31節に至っては、「非常に良かった」 (「トーヴ・メオード」 תָּיִבָה טוֹב) とあります。この語彙は単に「良しと見られた」だけでなく、神がトーヴな方であるゆえに、**神とかかわる地のすべてのものに対して「すべて良し」ということなのです**。形容詞の神の「善」 (トーヴ)、神の「いつくしみ」 (慈恵) は、被造物 (自然と人) に対する**神の恩寵的にかかわりの総称的概念**と言えます。「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い」 (ホドゥー・ラドナイ・キートーヴ/טוֹב יְיָ הַלְלוּ אֱלֹהֵינוּ) は、永遠の賛美となるのではないのでしょうか。

2. 「トーヴ」 (טוב) の概念 ⑤

● 「神が善である」ことを信じることは、信仰のアイデンティティーをより揺るぎないものにしていくと考えます。「神のトーヴについての瞑想」(2012年)を「牧師の書齋」に掲載しています。

● 肯定的な神さまイメージは自己肯定感と基本的信頼感を高め、その後の心理的発達を促します。

「あがない主アプローチ」と「父・牧者アプローチ」(イムヌエル聖宣神学院元院長の河村従彦師の文書を参照)。

No.		タイトル	聖書箇所
1	はじめに	瞑想の主題と目的、および語義	
2	第一瞑想	創造における神のトーヴ	創世記1章
3	第二瞑想	約束の地における神のトーヴ	申命記8章7節、他
4	第三瞑想	苦難における神のトーヴ	詩篇119篇65~72節、他
5	第四瞑想	将来における神のトーヴ	哀歌3章22~41節、詩16篇
6	第五瞑想	不条理における神のトーヴ	詩篇73篇
7	第六瞑想	神の家族における神のトーヴ	詩篇133篇
8	第七瞑想	貧しい者における神のトーヴ	マタイ福音書20章1~15節
9	第八瞑想	すべてを相働させる神のトーヴ	ローマ人への手紙 8章28節

3. 「バーダル」の概念とその目的 ①

- 神は光と闇を区別されます。

光と対峙するのは「闇」(「ホーシェフ」 חֹשֶׁךְ)です。創世記1章を意識して書かれたヨハネの福音書1章は、まさに「光と闇の相克」を描いていますが、「闇はこれ(光)に打ち勝たなかった」としています。そのことを創世記では「神は光と闇を分けられた」と記しています。「分ける・区別する」=「選ぶ」

- パウロが選び出されたのは以下の使命のためです。

【新改訳2017】使徒の働き26章18節

それは彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、こうしてわたしを信じる信仰によって、彼らが罪の赦しを得て、聖なるものとされた人々とともに(御国の)相続にあずかるためである。』

※人の「目を開く」使命は、人々を「闇から光に」「サタンの支配から神に立ち返らせ」ることによって御国の相続にあずからせるためです。これはイエシュアの働きと同じです。「霊の目を開かせる」務めはメシア独自の務めなのです。

3. 「バーダル」の概念とその目的 ②

【新改訳2017】 マタイの福音書4章15～16節

15 「ゼブルンの地とナフタリの地、海沿いの道、ヨルダンの川向こう、異邦人のガリラヤ。

16 闇(「ホーシェフ」 חֹשֶׁךְ)の中に住んでいた民は大きな光(אֵר)を見る。
死の陰の地(「ベエレツ・ツアルマーヴェット」 אֶרֶץ צְלִמּוֹת)に住んでいた者たちの上に光が昇る。」

● 「闇」と「死の陰の地」は同義であり、神の光が照らされていないことを意味しています。これはイザヤ書9章2節からの引用です。「ツアルマーヴェット」は有名な詩篇の中に使われています。詩篇23篇4節の「死の陰の谷を歩むとしても」、詩篇130篇1節の「深い淵から私はあなたを呼び求めます」がそうです。反対に「光」は「幻」(「ハーゾーン」 חֲזוֹן)と同義です。「幻がなければ、民は好き勝手にふるまう」(箴29:18)とあります。

3. 「バーダル」の概念とその目的 ③

●箴言29章18節が示す意味は「御国という確固たる主の定めを見つめていない民は滅びる」ということです。つまり、俯瞰的な神のご計画における御国のヴィジョンを見つめることなしには、神の民が堅く立つことはできないことを示唆しています。

●前方(将来)に見るべきものを持たないとき、人間は混乱し、精神に確固たる秩序を失い、荒廃するということです。この世がまさにその通りです。神の国を見つめることをせず、自己保身的な金や快樂、地位、名声などを見つめていくときには、人間は手綱を失った馬のように銘々が勝手な方向に行き、互いに争い、憎んだり、戦ったりするようになります。そして、その拳句には滅びということになるのです。しかし光は、ゆるぎない神のご計画とみこころ、みむねと目的を示します。聖書のいう「闇」「暗やみ」「死の陰」といった語彙は、神の光が見えない世界であり、いわば混沌の世界です。旧約の預言者たちが見た幻を正しく理解するには、「天からの光」であるイエシュアの啓示が不可欠なのです。

3. 「バーダル」の概念とその目的 ④

● 神は光と闇とをはっきりと「分けられる」(区分される、分離される)方です。「分けられた」と訳されたヘブル語の「バーダル」(בָּרַדַּל)は「区別する、切り離す、えり分ける、縁を断つ」という意味で、創世記1章に5回(4, 6, 7, 14, 18節)使われています。神は「光と闇」だけでなく、「聖なるものと俗なるもの」「きよいものと汚れたもの」「食べてよい生き物と食べてはならない生き物」「主に選ばれる者と選ばれない者」とを区別される方でもあるのです。他にも、出エジプト記26章33節では「至聖所」と「聖所」を「仕切る」垂れ幕があり、民数記8章14節では、イスラエルのうちから(つまり、イスラエルのうちの初子の代わりとして神にささげるために)レビ人を「取り分ける」という意味で使われています。たましいと霊、肉と霊を区別すること、これらはみな「聖別の概念」です。

● 「光」が神のご計画とみこころ、みむねと目的を示す概念であるならば、「闇」は光を悟らせないだけでなく、光を拒絶し、それに逆らわせる肉の力です。それゆえ、パウロは次のように言っています。

3. 「バーダル」の概念とその目的 ⑤

【新改訳2017】Ⅱコリント6章14節～7章1節

14 不信者と、つき合わなくびきをともにしてはいけません。

正義と不法に何の関わりがあるでしょう。光と闇に何の交わりがあるでしょう。

15 キリストとベリアルに何の調和があるでしょう。

信者と不信者が何を共有しているでしょう。

16 神の宮と偶像に何の一致があるでしょう。

私たちは生ける神の宮なのです。神がこう言われるとおりです。

「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、
彼らはわたしの民となる。」

●16節の後半は「幕屋」のことが記され、「彼ら」とは「神の祭司たち(イスラエル)」のことです。その祭司たちに対する「聖別」の要求です。一見、厳しい要求のように見えます。しかしこの聖別こそ、キリストに「立ち返り」、キリストのうちに「とどまる」ことであり、キリストのうちに「住む」ことであり、キリストと「一つになる」ことなのです。これが神の子どもとして歩む究極的目標です。

3. 「バーダル」の概念とその目的 ⑥

【新改訳2017】申命記22章10～11節

10 牛とろばとを組にして耕してはならない。

11 羊毛と亜麻糸を混ぜて織った衣服を着てはならない。

●ここは取り分けること(区別すること)の重要性を教えている箇所です。なぜ「牛とろばとを組にして耕してはならない」のか。それは牛とろばのそれぞれの力を削ぐことになり、有効に畑を耕すことにはならないからです。また羊毛と亜麻糸という性質の異なるものを混ぜることによって、その品質を損なうことになる懸念があるからです。つまり性質の異なるものを同時に使うことは、神の前にふさわしいことではなかったのです。それは神が「聖なる神」であり、区別される神だからです。

●聖さは純粋であることを求めます。純粋とは混じり気のないことを意味します。主のみことばは混じり気のないものであり、神の幕屋の器具も混じり気のない純金で作られていました。使徒パウロは「私たちは、多くの人たちのように、神のことばに混ぜ物をして売ったりせず」と述べています(Ⅱコリント2:17)。

3. 「バーダル」の概念とその目的 ⑦

●光によって闇の支配から主に立ち返って、主の家に住むことは、主にとどまることであり、主と一体となることを意味します。そうでなければ、永遠のいのちの結実はありません。前回でもふれたように、主と一体となるためには「父と母を離れ」なければならないのです(創2:24)。ここでの「父と母」とは、「もろもろの霊」が支配する「宗教」(ストイケイア)のことで、神殿ユダヤ教、律法主義を意味します。

17 それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らから離れよ。——主は言われる——
汚れたものに触れてはならない。そうすればわたしは、あなたがたを受け入れ、
18 わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる。
——全能の主は言われる。」

7:1 愛する者たち。このような約束を与えられているのですから、
肉と霊の一切の汚れから自分をきよめ、
神を恐れつつ聖さを全うしようではありませんか。」

今回のまとめ

【新改訳2017】詩篇23篇6節

まことに 私のいのちの日の限り

いつくしみ(「トーヴ」^{טוֹב})と恵み(「ヘセド」^{חֶסֶד})が

私を追って来るでしょう。私はいつまでも 【主】^{יְהוָה}の家に住まいます。

●光と闇の相克は、新しいエルサレムが実現されるまで続きます。しかもその相克の結末は明白です。主のみこころは私たちが主の備えてくださる食卓にあずかり、「天からのまことのパン」であるイエシュアを食べることによって、主と一つになることです。闇の力は神の偉大な光(神のご計画とみこころ、みむねと目的)に打ち勝つことはできないのです。それゆえ、私たちは神のトーヴな光に導かれながら、光の子どもとして歩み、主の家に住むことを、いつまでも(生涯)求め続けるべきではないでしょうか。